



TITLE:

神戸先生の自由貿易論

AUTHOR(S):

松井, 清

CITATION:

松井, 清. 神戸先生の自由貿易論. 経済論叢 1959, 84(6): 503-504

ISSUE DATE:

1959-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/132709>

RIGHT:

經濟論叢

第(十四)卷 第六號

故名誉教授神戸正雄博士遺影および筆蹟・原稿

統計学＝社会科学的認識手段論の 問題点.....大 橋 隆 憲	1
資本主義の運動法則における 論理的なものと歴史的なもの(=)・・・吉 村 達 次	17
急速税務減価償却をめぐる 所得税会計の保守主義.....高 寺 貞 男	37
ヘンリ・ジョージについての一考察・・・北 沢 康 男	55
ソースタイン・ヴェブレンに関する 一研究.....中 山 大	68
神戸正雄先生による 再保険特約方式の輸入.....佐 波 宣 平	85
記 事	
神戸先生御逝去	91
追 憶 文	96

新 村 出	井 藤 半 弥	本 庄 榮 治 郎	小 島 昌 太 郎
石 川 興 二	蜷 川 虎 三	大 谷 政 敬	小 山 田 小 七
堀 江 保 藏	島 恭 彦	松 井 清	

昭和三十四年十二月

京 都 大 學 經 濟 學 會

神戸先生の自由貿易論

松井 清

神戸先生の財政学については、他に書く人もあろう。わたくしはわたくしの専門を通じて先生の学問についての一つの考え方をもっているのである。

古い話であるが、明治四十一年十二月、当時の日本社会政策学会は、「関税問題と社会政策」という共通論題で、活潑な論戦を行っていた。明治四十三年の第二次関税改正を前にして、米穀の関税を引上げるべきであるかどうか論戦の中心となっていた。明治三十年代日本資本主義が一応の確立をとげたあとで、その後の発展のために、労働者の主食である米を輸入米に依存するか、内地米に依存するかについて、当時の学界の意見は二つに大きくわかれたのである。関税についていえば、米穀関税を、当時の一〇〇斤につき六十四銭から引下げるべきか、あるいは引上げるべきかが問題であった。米の関税について、貿易政策の二つの対立する立場である自由貿易か保護貿易かが

問題となつたわけである。当時京都大学の小辻教授であつた神戸先生は、この学会に参加して、米穀関税引下ぐべきであるという自由貿易の主張をされている。ちなみにあの有名な河上肇博士も、当時の京大講師としてこの学会に参加し、神戸先生とは反対に保護貿易の側に立たれたことは興味ぶかい。

いまこの論争に立入るつもりはないが、ひとはこれに関連した十九世紀のイギリスにおけるリカードとマルサスの論争、二十世紀初頭のドイツにおけるブレンタノとワグナーの論争を想起するであろう。同じような論争が、ドイツよりやや遅れて一九〇八年の日本でおこっているのである。そして神戸先生はリカード、ブレンタノと同様に自由貿易の側に立たれている。この三つの論争の背景をなす経済の現実は勿論ことなっている。したがって同じ自由貿易の主張といつても、その果たした役割は必ずしも同じではない。だが自由貿易論である限り、そこにはもちろん共通点もある。

わたくしのみるところでは、神戸先生は経済的自由主義者で

あり、学問上においてだけでなく生活実践の上でも合理主義者であつた。先生が朝九時に研究室に入られ、夕方五時に退出され、その時間がきわめて正確であつたことは有名な話である。

また先生の研究室を訪れたことのある人は知っているが、先生の研究室には客人用の椅子が置いていなかった。研究室では立話以上の長時間を要する話は謝絶されていたわけであろう。またこんな話もある。戦後学生達が毎年おこなうようになった河上祭に先生をお呼びしたときのことである。神戸先生はそのとき、「河上君はその『自叙伝』のなかで僕のことをけちんぱだと書いているが、自分ではそんなつもりはなく、ただ無駄なことがきらいなだけである。」といった意味のことを話された。神戸先生のこの言葉が真実であることは数々の事実がこれを示している。今だからもういいと思うが、戦後京大経済学会の財政が余りにも貧弱な有様をみて、先生は数回にわたって、少なからざる金額を寄付されている。先生御自身の生活も、必ずしもお楽ではなかつたものと思われるのに。